



名前のない 恋の物語



～あなたを想う誰かの～

mihira

1. 手を伸ばしても届かない

あの人の姿を見なくなって半年。

わずかにLINEでのやり取りはあったけど、それだけ。

そのうち話す話題もなくなって。。。。

『...急なことなんですけど...』

突然かかってきた電話に面食らう。

わかっていたのに、気づいていたのに。

あの人がここを去った時、体調不良を訴えていた。

「自宅で療養するから...たいしたことないって」

そうやって笑ったような、少し辛そうだったような顔で。

次に会ったのは大きな会館。

入り口にはあの人の名前。

ほんとに...ほんとに.....。

白い花で美しく飾られた祭壇は、まるであの人の様。

大きく広げた翼で、今にも世界へ飛び立ちそうな。

全てを包み込むようで、そして孤独な。

いつも何か心の中に抱え込む人だった。

何でも話して欲しかったし、自分も何でも話をした。

だけど、どこか遠慮していたんだろう。

その積み重ねが今回の結果だ。

電話の続きはこうだった。

『今朝、急に体調を崩して...ずっと病院にも通ってたんだけど』

知らなかった。

嘘。それは半分嘘。

あきらかに異常な発熱や痛みを、LINEの文字が伝えていた。

それを気づかないふりをしたのは自分だ。

ネットで検索したらすぐ出てくる、最悪の病名。

後で聞いたら、その通りだった。

あの人は伝えてくれていた。

だけど受け取らなかったのは自分だ。

踏み込んで、どこまでできるんだ？

そうやって、逃げた。

今、あの人はそこに眠っている。

でもそこへ駆けつけることはできない。

どれだけ親密な仲だろうと超えられない。

どれだけ想っていても近寄ることはできない。

焼香台が、あの人との間に壁を作る。

家族か、そうでないか_____

どれだけ涙を流しても免罪符にはならない。

どれだけ名前を呼んでもその資格はない。

別れの前に顔を見ることができた。

けれど触れることはない。

それができるのは、生まれたときから知っている家族だけ。

斎場にはもちろん行けない。

帰路、日常が押し寄せる。

あの人がいないだけで、世界は変わらず回り続ける。

心にぽっかり開いた穴に、吸い込まれてしまいそう。

吸い込まれて……消えてしまいたい……

あの電話があるまで、日常に追われてそれどころじゃなかったのに

毎日毎日ため息とともに涙が流れて。

何日これを続けたら、あの人への想いが伝わるんだろう。

誰に、伝えたいんだろう。

四十九日がすぎたころ、あの人夢に出てきた。

いつもとかわらない笑顔で話しかけてくる。

「ひさしぶり」

家族じゃないから触れられなかったあの人を

夢の中に閉じ込めた。

この人は、今、本当にここに、いる。

== 1 . 手を伸ばしても届かない 完 ==

2. 心は置き去りに

あいつが剣道部の後輩たちに稽古をつけている。
そろそろ帰る時間かと思って来てみたら……練習後の反省会が長引いているようだった。

俺は下校する顔見知りの生徒たちと雑談しながら、それも無くなってしまうと妙に手持ちぶさたで居心地が悪くなっていた。

……まだ終わんね一のかよ……

柔剣道場の入り口脇からでも見てとれるあいつの真剣な眼差し。
こちらに気付いた様子もなく延々会話を続けている様子に少し…ほんの少しだけ胸が締め付けられた。何故かは分からなかったけど。

わりと学校から帰る時は一緒だ。帰る時にわざわざ「一緒に帰ろう」とかいちいち言わない。
お互い用事が済めば何となく、いつの間にか一緒にいるのだ。
ただそれはタイミングがあった時だけで俺が忙しい時、あいつはさっさと帰ってしまう。
俺にしてもあいつが明らかに遅くなりそうな時は先に帰る。

その時に……。

その時に一言「先に帰る」と言うべきなのかどうか。
約束なんかしていないし一緒に帰らない時もある。こうやってあいつを待っている間もただ何もせず突っ立って待ちぼうけを食らわされているのも…俺が勝手にあいつを待っているだけ。あいつは今忙しい。俺は勝手に待っているだけ。

5分。5分待って何も帰る素振りが無ければ帰る事にしよう。
別に断りなんか必要ない。約束してるわけじゃないから…。

結局1人で帰る事になった。
やはり一言かけてから帰ればよかったとか、実はあの後すぐに帰ったんじゃないかとか色々考えながら帰るのに、車や自転車に何度かぶつかりそうになる。
…俺らしくない…。

だいいち一緒に帰ると言っても、いつも俺があいつを探していた。
行動パターンを把握しているからそれほど苦もなく見付かりはするのだが。
あいつから迎えに来たりする事は殆ど無い。そう、だから不安になる時がある。
あいつが俺と一緒にいる事を望んでいるのかどうかを。

特に嫌がるでもないし、かと言って部活の連中とつるむ事も多い。
1人での事も多いはずだ。寄る者を拒まないだけなのかもしれない。
別に誰かと一緒にいたいとか思っていない…俺は必要とされているわけではない……？

帰宅後、宿題にも手をつけず部屋で寝転んでいると、扉を小さく叩く音が聞こえた。

「何？」

扉の向こうから聞こえたのは遠慮がちな母親の声だった。

「……知ってる？」

聞かれたのはあいつのこと。まだ家に帰っていないのだと。母親同士仲が良かったので世間話のついでに、今日は遅いけどどうしたのかしら？という程度の話らしい。

あれから結構時間はたっているが、まだ学校に残っているのか？それとも連中とどこかへ…。どちらにしても高校生が帰宅していなくてもそんなに心配するような時間じゃない。

「どっか遊びに行ってるのかもな」
「うん……そうね。何かあったの？」
「何かって、何？」
「……ううん、何でもないわ。晩御飯できたら呼ぶわね」

扉を開けることなく母親は去っていった。母親ながら何やら感づいたからのようだった。

少しして今度は窓にコツンと小さな石のような物が当たった音が鳴った。

面倒だとは思ったが、もしいたずらで、それがエスカレートしては大変だと窓に近づいた。カーテンの隙間から見えた人物に驚く。

あいつは家の前にいた。正確に言えば俺の部屋の窓が見える場所。あわてて部屋から階段を駆け下り、玄関で靴に足をつっこんで飛び出した。

目の前に行ったもののどうしてそこにいるのかが分からず、無言で見ている。

「何で…こんなところにいるんだ？ずっとか？」
「……………」

何も言わず、数秒の間を置いて小さくうなずく。

「俺が気がつかないや、ずっと突っ立ってるつもりだったのか？何やってんだ？」
「……………うん…」

初めの方はすれて出なかったが返事を返してきた。

「……かったから……」
「ん？何？」

あいつの声があまりにも小さい囁くような声なので、少し体をかがませて耳をすませる。

「あんたが…いつの間にかいなくなってて……。それで…探してたら家に……」

「いつの間にかって……気付いてたのか？」
「……うん……。花壇のところに……」

全然こちらを見向きもしないで部活に夢中になっていると思っていたら
しっかり気付いていて……それで？

「終わって…帰ろうとしたら……いなかった」
「あー長引くかと思って先帰ったんだよ」
「……そう……」

会話が止まったのでかがませてた体を戻し、肩をとんとんと叩いた。
ふいにあいつの体が前に傾いて、俺の胸の辺りに頭をくっつけてきた。
体を抱き込む形になって面食らってしまう。抱きしめるわけにもいかない。

「どうした……？」
「ごめん…。迷惑かけた」
「迷惑って…別に……」

言いたくて、聞いてみたい質問を口にして良いのかとまどい、言いよどんでしまう。
俺が何も言わないので、あいつが問いかけてきた。

「よくわからない……」
「何が？」
「自分が…あんたがいないのを知って…急に苦しくなった。胸の辺りが」
「……」
「どこかで待ってる気がしながら…気付いたらあんたの家の前にいた。
部屋の明かりがついて、いるのがわかった。……そこから動けなくなった」
「そうか……」

意地が悪いと思った。こうやって相手の口から色々聞き出すのに、自分からは
何も言っていないのに気がついた。表面的な建前しか言っていないのに。

「悪かった…」

突然の謝罪の言葉にあいつが顔を上げる。

「もうちょっと待ってれば良かったな。タイミングが……悪かったな……」

多少ごまかしを入れたけど少しだけ胸の内を伝える事ができた。

俺のことをどう思っているのか知りたいために、わざと何も言わずに先に帰った。
本当はそんな事しないで、いつも通り道場に入って声をかければ良かったんだ。
そうすれば遅くなるなら先に帰れと、もう少しで終わるなら待ってると。
何も気にしないで素直にその時の状況に応じて返事を返してくれるのに。

お前が俺を必要としてるのか…知りたくて……。

コイツなら邪魔な時は邪魔だとはっきり言ってくれる。何も俺に気遣いなんかしない。
まっすぐに…バカが付くほど正直に接してくるのに。
だから俺は、俺がやりたい事をやればいい。一緒に帰れなさそうなら先に帰る旨を伝えて。
毎日帰る事なんか約束しちゃうけど……俺がそうしたいんだからそうする。
それが鬱陶しければコイツはそれなりの答えを出してくれるはずだから。
俺は、俺がコイツを必要としている事を行動で表していけばいいんだと思う。
かなり自分勝手な考えだとは思いますが…。今日みたいに胸くそ悪いのはごめん。

「何やってるの？あら、来てたのね」

開け放たれたままの玄関から母親が顔を出したのであわてて離れた。
何故だかにやにや笑われている気がする。

「ついでに晩御飯食べてく？」
「いえ、帰ります。じゃ、また明日」

そう言って、あいつは帰って行った。

「お鍋にしたから遠慮しないで食べてってくれたらよかったのね」

友達の母親からの誘いを照れながら断ったあいつの顔を思い出した。
そのはにかんだいつもの笑顔は、俺の心を温かく…優しくしていった。

== 2. 心は置き去りに 完 ==